I.　はじめに

このたび，第 20 回国病久原会という貴重な場で発表の機会をいただき，心より感謝申し上げます．米倉会長の「より多職種が参加し，共有できる会にしたい」というお考えのもと，今回，診療看護師（NP）として登壇できましたこと，大変光栄に存じます．職種の垣根を超えた会の運営を築かれている久原会の皆様の温かいお心遣いとご尽力に，改めて深く敬意を表します．

本稿では，私自身のこれまでの看護師・診療看護師（NP）としての臨床実践と成長の軌跡，そして現在取り組んでいる地域医療への挑戦について振り返りながら，上記テーマのもと，ご報告させていただきます．

II.　看護師人生の始まり

私は長崎医療センター附属看護学校（60 回生）で学び，看護師としての第一歩を踏み出しました．当時，校長を兼務されていたのは米倉先生であり，看護教員の先生方をはじめ多くの指導者のもとで，看護の基礎と専門職としての姿勢を学びました．

卒業後は長崎医療センターに入職し，配属先は高度救命救急センターでした．現院長でもあります高山センター長の指導のもと，重症度・緊急度の高い患者さんと向き合う日々を通して，救急看護の厳しさと奥深さを体感しました．

III.　診療看護師（NP）を志したきっかけ

重症度・緊急度が高い患者さんの対応では，状況が分刻みで変化し，医師の迅速な判断と治療が次々と行われます．その展開の速さに追いつけず，自身の知識・技術の不足を痛感する場面も少なくありませんでした．また，生命の危機的状況に直面する患者さんやご家族への関わりでは，倫理的判断や意思決定支援が求められる場面に多く遭遇し，看護師としての役割の限界と未熟さに向き合う日々でした．こうした経験から，「もっと患者さんに貢献できることがあるのではないか？」「尊敬する医師や先輩看護師と同じフィールドに立ち，より深く患者さんに関わりたい」という思いが強くなりました．

その頃，目標とする先輩看護師が診療看護師（NP）の道に進まれており，次第に“診療看護師（NP）”という新たな道を志すようになりました．その決断を後押ししてくださったのが，当時の髙口看護部長でした．温かい励ましとご支援をいただき，私は東京医療保健大学大学院看護研究高度実践看護コースへ進学しました．

大学院では 2 年間にわたり診療看護師（NP）として必要な 7 つの能力（コンピテンシー）を中心に学びました（表 1）．看護を基盤としながら基礎的な医学的知識を体系的に習得することで，患者さん・ご家族のニーズを包括的にとらえ，高度な看護実践に繋げることを目指しました．医療面接，身体診察技法

を含むフィジカルイグザミネーション，臨床推論，特定行為，倫理的意思決定支援など，多岐にわたる学びを積み重ね，診療看護師（NP）としての“基盤”を築く貴重な時間となりました．

診療看護師（NP）とは

「日本 NP 教育大学院協議会が認める NP 教育課程を修了し，本協議会が実施する NP 資格認定試験に合格した者で，患者の QOL 向上のために医師や多職種と連携・協働し，倫理的かつ科学的根拠に基づき一定レベルの診療を行うことができる看護師」とされています．

① 包括的な健康アセスメント能力
② 医療的処置マネジメント能力
③ 熟練した看護実践能力
④ 看護管理能力
⑤ チームワーク・協働能力
⑥ 医療・保健・福祉システムの活用・開発能力
⑦ 倫理的意思決定能力

表 1．診療看護師（NP）に必要とされる
7 つの能力（コンピテンシー）

一般社団法人日本 NP 教育大学院協議会より
引用･一部改変

図 1．長崎医療センター診療看護師（NP）

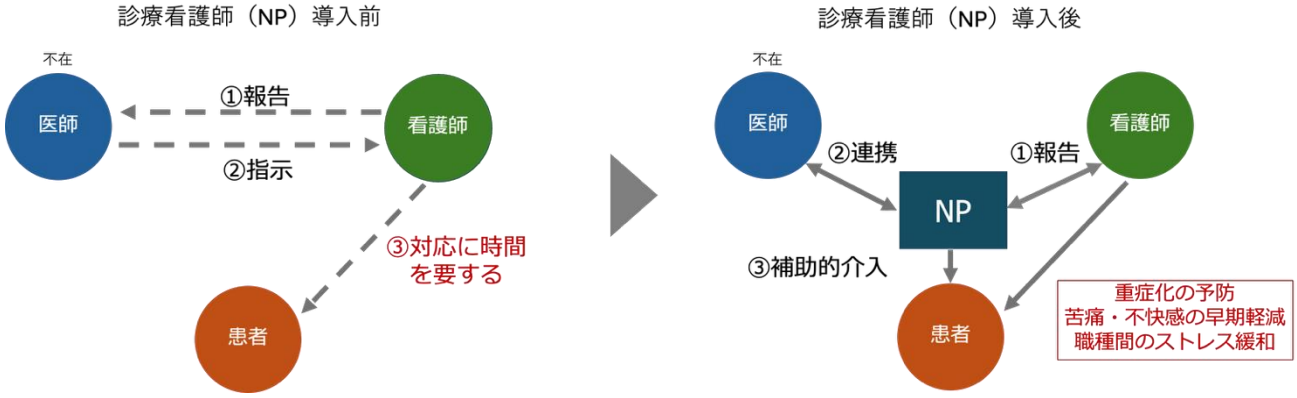
IV．長崎医療センター 診療看護師（NP）の実践

長崎医療センターでは，看護部の理念「その人がその人らしく」を基盤に，専門・高度看護実践者の育成・配置を進めており，全国に先駆け 2014 年度より診療看護師（NP）を導入しました．2025 年度は 5 名の診療看護師（NP）が在籍しており，救急科や外科，整形外科，小児科等で活躍しています(図 1)．とくに長崎医療センターの伝統でもある“教育”に関しては，全国でも有数の教育体制が整備されています．「地域医療の担い手」「チーム医療の要」をビジョンに掲げ，各診療科の医師や看護部から臨床教育・研究・キャリア形成などに関する支援を受けながら実践しています．

私は，大学院修了・資格取得後に再び長崎医療センターへ戻り，2 年間の研修を経て，脳神経外科に配属されました．急性期・周術期・回復期という幅広い病期において，診療看護師（NP）としての実践を

積み重ねることになりました．

図 2．医師不在時，診療看護師（NP）導入の効果



脳神経外科では近隣地域や離島・僻地などから救急搬送される患者さんが多く，それに伴い手術件数が増加していました．そのため，医師は救急患者対応，手術，予定外来に追われ，病棟に医師が不在の時間帯も少なくありませんでした．一方，病棟では看護師が患者さんの症状変化を十分に報告できず，患者さんの苦痛や不快感が遷延するといった状況がみられていました．

こうした課題に対して，診療看護師（NP）が配置されました．診療看護師（NP）は，医師と連携し，発熱や頭痛，意識変化など看護師からの報告を受け，補助的に介入することで，患者さんの苦痛の早期軽減と重症化の予防に貢献しました．また，医師の業務負担軽減に加え，看護師が自信を持って実践できる環境構築に努めたことで，職種間のストレス緩和やチーム医療の円滑化にも繋がりました．さらに，創部管理や退院支援，多職種連携カンファレンスなどにも積極的に関与し，医師・看護師・リハビリ・MSW など多職種間の情報共有を図り，病棟運営の質向上に寄与しました（図 2）．

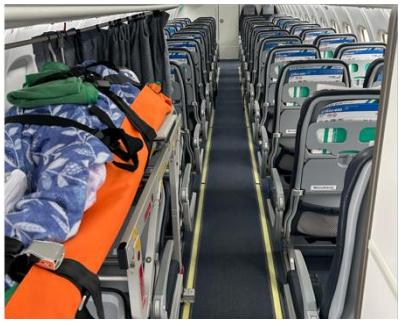
なかでも特徴的な実践のひとつが，「急性期治療後の帰島支援」です（図 3）．長崎県は離島が多く，急性期の治療を終えた患者さんが地域・離島へ戻る際には，病院間や搬送手段，日程，同行人員確保など多方面の調整が必要になります．さらに重度後遺症を抱え，酸素投与や気管切開，人工呼吸器を装着している患者さんの搬送は困難を極めます．帰島支援に診療看護師（NP）が加わることで，日程調整や人員確保がスムーズとなりました．また，搬送中は診療看護師（NP）が状態を評価し必要なケアを提供するため，安全性を担保しながら，重度後遺症があったとしても住み慣れた地域（離島）へ帰ることが可能となりました．さらに，離島等医療連携ヘリ（Remote Island Medical Co-operation Air Service：RIMCAS）の導入により，帰島に要する移動時間が大幅に短縮され，身体的・心理的負担が一層軽減されました．この取り組みにより，「急性期病院から地域へ」というケア移行を，安全性と患者さんの尊厳を両立させな

がら支援する体制が整いつつあります．離島地域の特性を理解し，現場の実情に合わせた実践を展開する中で，診療看護師（NP）の役割が地域医療の持続性を高める一翼を担うことを強く感じました．

図 3．急性期治療後の帰島支援の実際

•離島空港にて現地救急隊へ引き継ぎ

•診療看護師（NP）が RIMCAS へ同乗



•民間航空機内の様子

V.　生まれ故郷・南島原市での挑戦

南島原市は，人口減少と高齢化が急速に進行しており，医療・介護ニーズが高まる一方で，病院や診療所の閉院が相次いでいます．その結果，地域住民は医療へのアクセス悪化による不安を抱え，同時に，医師や看護師など医療従事者は需要の増加に伴う過重労働に直面していました．このままでは地域医療の継続が困難になるという，生まれ故郷の実情を目の当たりにしました．

このような状況を前に，「少しでも地域（生まれ故郷）に貢献したい」という思いから，訪問看護ステーション フォレストの設立に至りました．フォレストの理念は「地域の方が，様々な健康上の問題（疾患，高齢，障害等）を抱えたとしても，住み慣れた地域で安心・安全で充実したその人らしい生活を長く送ることができるよう支援する．」ことです（図 4）．開設から半年が経過した現在，悪性腫瘍による終末期ケア（在宅看取りを含む），在宅高流量酸素療法（High Flow Therapy）装着下での呼吸管理，グループホームでの重症褥瘡管理など，これまで在宅生活の継続が難しいと考えられてきた患者さんの支援ができました．「自宅で自分らしい生活をしたい．最期を迎えたい．」という患者さんや家族の願いを実現できた経験は，地域・在宅医療の意義と可能性を改めて実感するものでした．

長崎医療センターは，急性期総合病院として多くの患者さんを受け入れ，地域での療養生活への移行を支援してまいりました．一方で，その移行先である地域の医療・介護基盤における課題が見えたのも事実です．生まれ故郷での訪問看護ステーション開設という挑戦は，まさにこの長崎医療センターでの高度な臨床実践と，地域連携の現実を知った経験があったからこそ実現できたものです．

図 4. 訪問看護ステーション フォレスト

VI. まとめ

長崎医療センターで培われた高度な看護実践を基盤とし，様々な領域で専門性を発揮し，医療・看護の体制構築に貢献できる人材となることが診療看護師（NP）の目標です．今後も長崎医療センターが拠点となり，診療看護師（NP）の創出・育成を行い，活躍の場がさらに広がることを期待しています．また，私は長崎医療センターで培った経験を礎に，地域の中で人々の暮らしを支える医療・看護の形を模索し，これからも地域に根ざした実践を積み重ねてまいります．

VII. 謝辞

この度は，久原会ホームページへの寄稿の機会を頂き，心より御礼申し上げます．
寄稿にあたり，これまでご指導くださった多くの先生方や看護師の方から学んだことを改めて振り返る機会となりました．皆様から頂いた学びや励ましが，私の実践の支えとなり，今回の寄稿につながったと深く感謝しております．今後も，教えていただいたことを糧に，地域の実践に真摯に向き合い，診療看護師（NP）として成長していきたいと思います．

森塚 倫也（もりつか ともや）

合同会社 Forest

訪問看護ステーション フォレスト 管理者

診療看護師（NP）

2006 年	長崎医療センター附属看護学校入学（60 回生）
2009 年	長崎医療センター入職・高度救命救急センター配属
2014 年	東京医療保健大学大学院高度実践看護コース進学
2016 年	診療看護師（NP）資格取得
	長崎医療センター 復職・脳神経外科配属
2025 年	生まれ故郷である南島原市にて訪問看護ステーションを開設